



西日本支部

関西支部の研究拠点～公的研究機関紹介(6)

奈良県農業総合センター

生産技術担当・資源開発チーム 浅尾 浩史

明治28年に奈良県農事試験場として設置され、これまでスイカの品種改良やイチゴの作型・品種開発などの研究によって、奈良県農業の振興に貢献してきました。そして、本県の農業振興を効率的に行うために、研究開発部門・普及指導部門・担い手養成部門を統合した農業総合センターが、平成18年に組織改編で3部門が連携を強化し、本県農業が抱える諸課題の解決を図っています。

平成22年までの研究開発目標として「奈良県科学技術振興指針」に基づく「試験研究中期運営方針—研究課題の重点化—」が平成19年に策定され、以下の3つの研究分野と9つの研究目標を設定して効果的・効率的に試験研究に取り組んでいます。

1. 新生産技術の開発

- 1) 労働負担軽減のための省力・軽作業化技術の開発
- 2) 消費者・生産者ニーズに対応した高品質・安定生産技術の開発
- 3) 農業経営管理・評価技術の開発と情報提供の推進

2. 地域特産物の高付加価値化

- 1) 植物機能に着目した作物の生産技術開発
- 2) 魅力ある新品種・品目の育成、特産物の開発
- 3) バイオテクノロジーを利用した育種技術の開発

3. 環境保全型農業技術開発

- 1) 環境負荷を軽減した持続性の高い生産技術の開発
- 2) 資源の循環利用を促進するためのバイオマスなど資源利活用
- 3) 鳥獣害回避技術の開発

一方、試験研究計画と成果評価については、「研究第三者評価会議」を設置し、研究手法や成果、普及状況について外部委員の事前・中間・事後評価を受け、評価結果を研究課題の設定や研究活動に反映させ、効果的かつ適切な試験研究の実施に努めています。

また、産官学共同研究を積極的に推進して、より高度な実用性の高い試験研究を進めるため、奈良先端科学技



奈良県農業総合センター
(建物後ろの山は大和三山の一つの畝傍山)

術大学院大学新名名誉教授を代表研究者として地域結集型研究開発プログラム「古都奈良の新世紀植物機能活用技術の開発」((独)科学技術振興機構)に平成18年から取り組んでいます(平成22年まで)。この研究では、奈良で古来から「食」や「薬」に用いられている優れた植物素材である「吉野葛」・「大和マナ」・「大和トウキ」・「大和シャクヤク」・「大和茶」の機能性などの活用に関する実用化技術の開発を行い、新商品を創出し、ブランド化を図ろうとしています。

テーマ1-1: 吉野葛の骨粗鬆症予防機能などの評価及び栽培食品への活用

テーマ1-2: 大和マナの抗炎症機能などの評価及び栽培・食品への活用

テーマ2: 優良大和生薬品種の鑑定及び増殖技術の開発
テーマ3: 大和茶のメタボリックプロファイリングを利用した最適栽培・加工技術の開発

現在、上記テーマについて、産(ナント種苗、田村薬品工業、三晃精機、パンドラファーム、大和茶販売、サントリーなど)・官(農業総合センター、工業技術センター、(財)中小企業支援センターコア研)・学(奈良先端科学技術大学院大学、奈良女子大学、京都大学、大阪大学、近畿大学など)が一体となって、研究開発や企業化を進めています。農業総合センターではこれらのテーマの中で、以下の研究を担っています。

- ・吉野葛の簡易栽培法・収穫法の開発
- ・大和マナにおける栽培条件とITC含量の関係解明
- ・大和マナのSハプロタイプの同定と育種への利用
- ・大和マナの周年栽培化技術の開発と収穫の軽労化
- ・大和トウキの栽培法の開発
- ・代謝物の変動に基づく製茶工程の最適化

今後、民間との共同研究や農商工連携によって幅広い研究課題に取り組み、地域振興に貢献したいと考えています。